

富士山富士宮ルート山行報告

山行日:2019年5月19日(日)

天候:快晴

登山方法:山スキー

メンバー:池田(リーダー)、薄井(記録)、Ku、Ki、Ka、F、O、Y

行動時間:

5:35 登山口(五合目)ー6:00 六合目ー7:15 雪渓移動ー9:05 八合目ー9:50 九合目ー

10:45 九号五勺ー11:57 奥宮ー12:30 剣ヶ峰ー13:20 奥宮ー14:45 六合目ー15:00 登山口

東北でお世話になっている山岳会御一行様が、富士山へ遠征してくるようになった。前日の三ノ沢ツアーを終え、駒ヶ根から道の駅すばしりへ。合流した東北組とともに、翌朝、富士宮登山口へ向かう。予報では晴天は約束されていなかったが、寄り道した早朝のコンビニの駐車場からは、白みかけた空に浮かび上がる富士山のシルエットが確認できた。

スタートとなる5号目は標高 2,400mだから、車で上がるにもそれなりに時間がかかる。5 時頃に到着すると、比較的車は少なく、登山口のある1段目に駐車することができた。曇り空で肌寒い中、支度をしてスタート。東北組5人とちば山2人に、途中からメンバーの友人のYさんが同行して8人となった。



最初はスキーを背負って、ところどころ雪渓の残る登山道を歩きだす。六合目の雲海荘の裏側からは、しっかりと雪のついた斜面になった。FさんとKaさんはシール登高で頑張りたいとのことだが(結局ほぼ最後までスキーで登り切った。お見事)、他のパーティも含め、大半はここでアイゼンを装着。2年前に初めて来たときは、私なんか雪の富士山に?と思ったが、実はこの時期の登山

者は少なくない。正統派冬山スタイル、トレイルランナー、ソリ遊び、何でもありだ。直登できるし、涼しいぶん、日を間違えなければかえって夏より楽かもしれず、エキスパートのみの世界というわけではないのだ。



ツボ足でも直登はちょっと辛いやや急な登りから、頂上へつながる雪渓へ、今年はスキーを履いたまま移動できた。わいわいと前後しながら登っていく。鳥居がある八合目を過ぎると、頂上を遠望しながらひたすら前進あるのみ。しかし標高を稼ぐほど空気は薄くなり、あからさまに息が上がるわけではないのに、だるくてつい立ち止まりたくなってしまふ。そしてぎりぎりかと思っていたお天気は良い方向に変わり、快晴無風なので、標高を上げて暑くなるばかりだ。



パーティは次第に離れていった。休憩のたびにメンバーを集めたが、山頂の奥宮から剣ヶ峰へは時間切れで待ちきれず、12時頃までに登頂した6人で向かうことにした。KuさんとKaさんはスキーで歩きたくなる道だと言って、スキーにシールを装

着して剣ヶ峰へ登っていく。確かに、お釜の縁は大変に気持ちのいい天空のお散歩ルートなのだ。

外側の下界はみっしりとした雲海に覆われていて、やはり他の山とは飛びぬけた高さを実感する。間に合わなかったFさんと池田さんを除いたメンバーで、日本最高所へ無事到達。遠路来てもらった甲斐があった(その後Fさんも到達)。



見下ろすお釜は荒涼として、ここは月か火星かという眺めの中、周囲の欧米人パーティにはとんでもなく軽快に飛び回っている宇宙人(としか言いようがない)もいて、一層異界的な雰囲気を出している。KuさんとKaさんは剣ヶ峰からドロップし、トラバースしてお釜の縁に戻ってきた。おそらく次回、お釜へのドロップインを狙うために試走したのではないかと思う。



さて、遅れたメンバーも無事集合し、神社からはまた全員そろって下り開始である。ロープの張られた登山道を少し下り、九合五勺の小屋を見下ろす場所でスキーの準備を済ませると、みんな待ちかねたように早々に準備をしてスピーディに下りて行ってしまった。このメンバーだと登りも下りも最低レベルになってしま

う。容赦なく飛ばしていくので必死に後をついていく。スピードは出るけれど斜面はぼこぼこだし、落石はそこらじゅうに散らばっているし、ほかの山に比べて格別に快適滑走というわけではない。しかし、行きも帰りも長くて登りがい、滑りがいがあるのと、やはり「富士山」というブランドが、毎年でも来たくなる魅力かもしれない。

全く休憩を取らず六合目まで滑り降りてしまいそうな勢いのところ、お願いして途中で喉を潤した。休んでいる間にガスが上がってきて、視界の悪くなった中を六合目まで、最後の滑り。小屋の裏でスキーを脱ぎ、余韻に浸りながら登山口に戻ってみると、そこは朝と同じ曇り空のままだった。そして車での下山中は雨、御殿場の町はなんとなく晴れていたが、振り向くと富士山はすっぽりと雲に覆われていた。今日の快晴は雲上だけの出来事だったようだ。

御殿場市温泉会館の浴場から富士山が拝めなかったことが、今回唯一の残念な点となった。

